
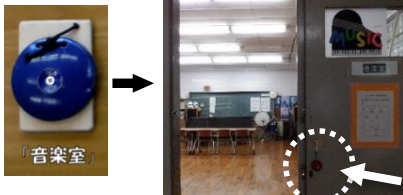
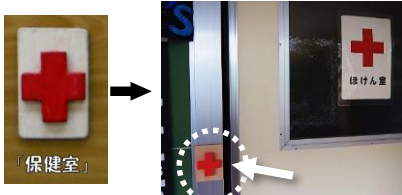


<p>【教材名】</p>	<p>オブジェクトキュー（活用例1）～活動場所のオブジェクトキュー～</p>
<p>【画像】</p> 	<p>【例1】「音楽室」</p>  <p>【例2】「保健室」</p> 
<p>【動画記録】</p>	<p>有・<b>無</b></p>
<p>【対象】（障害の程度・特性）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚部～高等部(全学年)</li> <li>・盲ろう児(視覚聴覚二重障害)、視覚障害を併せ有する重複障害児</li> <li>・視覚や言葉による情報の受信・発信に困難があり、コミュニケーションに触覚の活用が有効な幼児児童生徒</li> </ul>
<p>【単元・活用場面】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活全般（時間割の確認時や活動場所への移動時 等）</li> </ul>
<p>【ねらい】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「物」を通して次の活動場所を知ることができる。</li> <li>・提示されたオブジェクトキューを触り、教師が発信するキューの意図を理解し、自分で判断し、自分の意思を表現することができる。</li> <li>YES → 応じて移動し、活動する。 NO → 応じない。移動しない。</li> <li>・NO の場合、繰り返し教師と交渉を重ねたり、別のオブジェクトキューの提示を受けて活動を選択したりすることができる。</li> </ul>
<p>【導入時の配慮点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・触って活動場所をイメージしやすい「物」のオブジェクトキューからスタートして、徐々に具体物から抽象的なキューを導入していくようにする。</li> <li>例) スプーン=食堂 カスタネット=音楽室</li> <li>特に初期段階では、形や手触りから活動に結び付きやすい具体物、あるいはその断片を選定すると有効である。</li> <li>・選定したオブジェクトキューが本当に子どもにとって分かりやすいものであるか、アイマスクをして実際に視覚情報なしで確認してみる。</li> <li>・オブジェクトキューで活動に誘った際、移動先に付けたオブジェクトキューでその場所を確認すること。</li> </ul>
<p>【使い方】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その日の活動の流れに沿ってスケジュールボックスに時系列にオブジェクトキューを配列し、順番に触って予定を確認する。</li> <li>・活動に誘うときにそのキューで次の活動(場所)を予告して活動に誘う。</li> <li>・活動後にキューを「おしまい」ボックスに入れ、活動の終わりを確認する。</li> <li>・活動へ誘う際、そのオブジェクトキューで交渉したり、応じない時は違うオブジェクトキューも選択肢に加えて交渉したりするツールとして活用する。</li> </ul>
<p>【効果・成果・課題】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内で繰り返しよく利用する部屋やよく通過する部屋にオブジェクトキューを付けることは、校内移動の歩行地図のとして重要な手掛かりになっている。</li> <li>・オブジェクトキューの活用が定着してくると、キューを通したやりとり(交渉、選択、意思表示、折り合いなど)の過程を丁寧にしやすくなり、子どもの意思を確認するコミュニケーションツールとして活用できるようになった。</li> </ul>
<p>【備考】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 「保健室」のオブジェクトキューの経緯について（補足）</li> <li>・対象児が幼稚部の頃、キューは“肝油”の缶だった。当時、幼児は保健室に行って肝油を1～2個食べ、健康観察をすることが日課と</li> </ul>

	<p>なっており、保健室と肝油が場所を結び付ける「物」であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・肝油の缶が保健室の入口に下げてあり、幼児はそれを確認した。</li> <li>・肝油の缶のキューは小学部時代も継続された。</li> <li>・中学部になってキューの見直しに取り組み、キューを板に貼り付ける仕様に移行した。しばらくは肝油の缶を板に貼り付けて活用していたが、肝油自体は小学部から食べていなかったのもっと一般的に誰もが保健室をイメージできる象徴的なシンボルに替えようと考えた。そこで、保健室のドアに貼ってあった赤十字マークへ替えることにした。したがって、赤十字マークを選定した理由は、赤十字マークの概念という観点ではなく、その部屋のユニバーサルなシンボルマークということである。</li> <li>・その後、赤十字マークのキューは最初の板の1/2に小型化され、さらに高等部の頃には1/4の大きさに縮小して携帯性を向上させた。</li> </ul> <p>&lt;考察&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オブジェクトキューという意味付けされた「物」の理解が進み、キューと場所との関係が定着すると、違うものに替える際に繰り返し丁寧に伝えることで、混乱なく移行できた。</li> <li>・板に貼り付けたりサイズを縮小したりする際も、同様に繰り返し丁寧に伝えることで、混乱なく移行できるようであった。</li> <li>・オブジェクトキューの活用がしっかり定着した後、具体物のキューから板に貼り付けたキューに移行したり、キューを縮小サイズに移行したりすることは、“抽象化”の概念形成を促す大切な学習になったと思われる。</li> </ul>
<p>情報提供者問い合わせ先 氏名（学校名）</p>	<p>新潟県立新潟盲学校 教諭 上田 淳一 * 連絡先は研究会事務局までお問い合わせください。</p>